

《特集 北東アジアの地域間協力の課題》

特集にあたって

勝 村 哲 也

ここでいう「北東アジア」は、バーチャルな概念である。少なくとも「北東アジア」という概念の提示が、ただちに研究領域の形成に直結するという点で、極めて今日的な概念である。この概念は、バーチャルな概念であっても、すでに何がしかの地理的イメージを、われわれは共有していて、それを中国及び韓国、北朝鮮、極東ロシア、モンゴル、そして日本を含む地域とするのが、大方の合意するところである。このような地理的イメージが、いつから形成されたかを考えてみると、それはさほど遠い過去に起こったことではないことにすぐに気づく。時期をもって示せば、概ね1989年11月9日のベルリンの壁の崩壊と12月3日のマルタ島での米ソ首脳による東西冷戦終結宣言以降のことであることに同意が得られよう。

そうなると、「北東アジア」研究はたかだか14、5年の歴史しかないということになるのであるが、それでも「北東アジア」の概念に対して一層細かな規定を求めると、決して一様な回答は期待できない。それゆえにこの領域の研究が一筋縄ではいかぬことを自覚させられるのである。「北東アジア」の概念が明確でなければ、そこでの地域間協力にどのような課題があるか、その課題追求にどんな手掛かりがあるかが見えてこない。北東アジア研究を志す研究者は、どうしても自らの北東アジア理解を表明せざるを得なくなるのである。

わたしはこれを、北アジアと東アジアの対立構造の緩和と、北アジアと東アジアの協力という観点から説明を試みたいと考えている。ここで東アジアというのはいうまでもなく中国そのものであり、16世紀以前の状況に照らせば、北東アジアは明確に「パクス・シニカ」とそのジュニア・パートナーの世界であった。そしてこの構造は、西欧の衝撃を受けても変わらず、1895年の日清戦争以後国民国家が陸続として誕生した後も基本的に影響を受けることがなかった。その構造に変化が生じるのは、1945年の日本の敗戦前後とそれに続く1949年の中華人民共和国の成立であって、中国への対立の極として「東南アジア」が措定されたことに始まる。この研究領域の出発点は、明らかにSEATOへの地政学的関心に基づくのであり、その点から言えば、「北東アジア」は東南アジアと同類である。

かつて「パクス・シニカ」のジュニア・パートナーであった「東南アジア」が中国から

離脱したときに、「北東アジア」は「東南アジア」の北に隣接していて、1989年以降にはっきりとした概念を持つことになる。そしてその構成は、疑いもなく「中国とその周辺諸国」であって、「中国を東アジア、周辺諸国を北アジア」と論理的な分離を試みたときに、先に述べた「北アジアと東アジアの対立構造の緩和と、北アジアと東アジアの協力という観点」を基軸にして、「北東アジア」が社会科学の研究領域として成立することを検討したいと考えている。

東洋史学でいうところの北アジアは、モンゴル高原を中心にして、東は興安嶺を経てマンジュリアに連なり、西はアルタイ山脈を隔ててズンガリアから中央アジアのステップ地帯にまで続く。ここは草原が大半で古来遊牧民族活躍の舞台になったところで、北方には針葉樹に覆われたシベリアの森林地帯が広がり、その間隙を縫ってイルティシュ、オビ、エニセイ、レナ、黒竜江が北流あるいは東流するために、狩猟と漁撈に適する。一方、東アジア、つまり東北部および周辺部を除いた中国の大半は、遼河、黄河、淮河、珠江などが東流し、農耕に適した照葉樹林地帯となっている。

こうした地域性の違いは、東アジアと北アジアにまったく異なった二つの文化圏を生み出したのであり、現代においてもこの両地域をひとくくりにして「北東アジア文化圏」を設定することはできない。けれども、いくら北アジアが東アジアと異なるといっても日本や韓国を北アジアに含めることは、この地域がかつて中国のジュニア・パートナーであったことを認めるよりも一般には抵抗感が強いと考えられる。しかしながら、モンゴル、中国東北部、北朝鮮、韓国のいわゆる「満蒙朝鮮」には、草原と針葉森林の地帯という共通項があるだけに、これに極東ロシアを加えて「北アジア文化圏」を構想することは、従来の社会史や文化史の成果によって十分に可能である。先日私は韓国の南部を旅して、その景観があまりにも九州北部と似通っていることに驚き、いまさらながら朝鮮半島から西日本をひとまとまりの地域として捉えてみようという思いに駆られたのであった。さらに、近年の言語学、人類学、遺伝子情報学の進展はこの思いを裏付けるところとなっている。日本と韓国を「北アジア文化圏」の範疇で考察する根拠が見い出せるようになってきたのである。

私は、元来日本や韓国やモンゴルの文化を同じ範疇で理解するように努めてきた。2002年11月に上海の復旦大学韓国学研究所で開催されたシンポジウム「緩和と協力——北東アジア国際関係の30年」において、中国人がわが国に対して核や軍備増強への懸念を持っていることに関し、日本人が持つ「尚武」の伝統をモンゴルと関連付けて説くことによって理解を求めたことがある。また、かねて食文化の比較を行ってきた結果、モンゴルから朝鮮半島を経た「汁食」がわが国に特徴的なことに注目している。韓国が伝統的に汁食文化の国であることはよく知られているが、モンゴルの遊牧民の常食も羊肉の馬乳煮込みであって焼き肉ではない。わが国とモンゴル、朝鮮とは同じ基層文化を持つことが予想される。そのことは同時に、中国との隔たりを明らかにすることになるであろう。余談に過ぎるか

も知れないが、中国には伝統的に「汁飯」はないのであって、天津にいわゆる「天津飯」がないことは、ご経験になった方もおられよう。北アジア文化圏と東アジア文化圏は、幾たびもの時を経て相互に重なり合いながら今日に至るのであるが、基層文化における差異の確認は、二つの地域の協力を進める上で重要である。

さて、「北東アジア」を領域と定めての研究は、二重の意味における「ボーダーレス」が解明への共通項となると考えている。ひとつは、国民国家としての国境がかすみ始めたことであり、いまひとつは、社会階層として人々を隔てていた仕切りが取り払われてきたことである。前者を「無境」、後者を「無層」とよび、総体として「ボーダーレス」を「無界」と訳してはどうであろうか。いずれにしても「北東アジア」は、社会、文化、制度、思想、宗教とあらゆる局面において「ボーダーレス化」が進行しているのであって、このことに関する共通の認識が地域間協力にも不可欠であると考えたい。このあたりの研究を深めることを通じて、「北アジア」と「東アジア」の対話が進み、また「人文科学」と「社会科学」の協同も始まるであろうことを、私は期待している。

(Tetsuya KATSUMURA)